

編集局の 25 年

岩崎 恵美

(学術新報社)

真昼の東大山上会館，前任者となる上司に連れられ会議室に入る。机を口の字に移動する間にも 30 名近い委員が着席し，一人がスライドの準備を始めた。自身の研究紹介と質疑応答が 15 分ほどあったろうか。室内が明転し，資料が次々に配られ，編集委員会が始まった。企画案のプレゼンと議論が延々続く。まるで異言語の会議を遠くに聞きながら，「光学編集局」と記された新しい名刺をぼんやり眺めていた。自分に務まるのか。初めて編集委員会に参加したあの日から，無我夢中で四半世紀余が過ぎた。

当時の「光学」は，学会誌本来の役割である原著論文の掲載と，依頼の解説記事からなる特集を 2 本の柱としていた。だが，1994 年から下降に転じた日本語原著論文の投稿は，その後の 10 年で 3 割に急減する。そのころすでに論文誌の使命を終えつつあった「光学」は，いま思えば，より特集に注力していく転換期にあったのだろう。

特集の内容は発行の約 1 年前から隔月 3 回の編集委員会で議論を重ねて決定する。容赦ない意見の応酬も定番の夜の酒宴で連帯感に変わる。物事の進展が加速する時代の中で多くの変化を重ねつつも，悠長ともいえるこのスキームが脈々と継承されたのは驚くべきことだ。機能論風にいえば，編集委員会は緊張と緩和を醸すための装置で，会誌出版を通して学会内に深い交流や学びを生み出すことこそが真の目的といったところか。そんな光学会の人々の文化に，筆者もいつしか絡めとられていた。

一方で，従来は原著論文と広告の二大収益に支えられていた「光学」は，その収益構造を失ったことで学会から常に経費削減を求められる宿命を負っていた。とりわけ 2015 年の応用物理学会からの独立に際しては，新生学会の財政基盤の脆弱さに鑑みて冊子の廃止が決まりかけた。だが，光学会のアイデンティティを体現する「光学」の冊子廃止は，学会の求心力の毀損につながると容易に予想できた。これを制しようと躊躇なく委託費 75% カットを申し出た当時の判断が，経営者として正解だったかはわからない。ただそれほどまでに入れ込みすぎたことは確かだ。

文字通り心血を注いできた「光学」だが，編集局を次世代に繋ぐことを決意し，昨年晴れて引退した。これまで苦楽を共にしてくださった 15 人の編集委員長と 300 人余の編集委員，ご執筆くださった数千名の方々，そして支援してくださった会員諸氏に，この場を借りて心から感謝申し上げます。今後は，2020 年のコロナ以降オンライン開催となっている編集委員会が創っていく新たな「光学」を，一読者として楽しみたい。

露になる機会は少ないが実は波乱万丈だった編集局の 25 年，エピソードには事欠かないが，そろそろ紙幅も尽きた。裏話はいつかどこかで開陳するでしょう。